



月刊「致知」(致知出版社) 2月号(2015年1月1日発行)の「致知随想」(P. 89～90)において、社会福祉法人進和学園理事長出縄雅之による「障がい者に働く誇りと喜びを」という文章が掲載されました。

同誌は、人間学を追求し有名無名を問わず、各界各分野で一道を切り開いた人物の体験談を紹介する等、人間の生き方の原理原則を満載した定期購読の月刊誌です。

多くの読者に支持され、「木鶏クラブ」という愛読者の会が、全国各地に広がっています。

進和学園設立の原点を、敗戦直後の貧困時代に遡り、二人の兄の経歴を辿りながら、本田技研工業(株)様の深いご理解ご支援を得て、障害者に働く機会を創出して来た道程を振り返りました。「仕事を通じて互いが情熱を持って向き合うことで、健常者も障害者も差別なく心通い合える社会が実現できる」との想いを披露しました。

このような機会に恵まれましたことは、誠に光栄なことであり、永年に亘り、貴重な仕事をご提供頂いている本田技研工業(株)様はじめ地域・社会・行政・企業の多くの皆様のご支援ご指導の賜と重ねて感謝申し上げます。

2015年 1月 吉日

株式会社 研 進/社会福祉法人 進和学園

障がい者に 働く誇りと喜びを

出縄雅之

私が理事長を務める神奈川県平塚市の「社会福祉法人進和学園」は昭和三十三年、次兄・出縄明によって設立されました。

当初、知的障がいのある子供のための児童施設として始まりましたが、本田技研工業(以下ホンダ)さんの自動車部品の組立業務を請け負わせていただけたことになった昭和四十九年を機に、成人・授産施設を開設。以来、知的障がい者が健常者と同じように働く喜びを実感し、自立できる環境づくりに心血を注ぎ、他に運営する入所・通所施設なども含めると、現在では約五百名の方にご利用いただき、うち、約三百名の方が作業に汗を流してくださっています。

そして、いま私が改めて皆さんにお伝えしたいことは、たとえ障がいがあるうとも、仕事を

流し、情熱を持って向き合い続ければ、障がいがあるうとなかろうと、自ずと心と心が通い合ってくるものなのでしょう。

また長兄の光貴は、加工賃や物流などを一括管理する営業窓口会社「研進」を設立。その一方、学園でも機械メーカーで働いていたOBにご指導を仰ぎ、加工や組立の際に部品や工具の正しい作業位置を指示・誘導する治工具の開発を行ったりし、ホンダさんが要求する仕事の水準に応えられる万全の態勢を整えようと努力を重ねました。

多くの方々に支えられ昭和四十九年、「進和職業センター」は操業を開始。ホンダさんのご指導の下、障がい者、研進・学園職員が一体となって仕事に取り組んで参りました。三十数年か月不良品ゼロの記録を達成したり、知的障がいの福祉施設では日本で初めて、国際的な品質基準ISO9001も取得。また現在に至るまで全国平均より高い工賃を支払うことができています。まさに知的障がい者であっても、環境さえ整えば社会の一員として立派に働き自立していけることが証明されたのです。

開園以来、ともに障がい者福

通じて互いが情熱を持って向き合うことで、健常者も障がい者も差別なく、心通い合える社会が実現できるということです。当園設立の原点は日本が敗戦を迎えた七十年前に遡ります。当時私は十歳でしたが、戦地から戻った年の離れた二人の兄は、貧困の最中にあった一家を支えるため、すぐに働きに出ることになりました。長兄・光貴はホンダに入社。身を粉にして働く中で創業者の本田宗一郎さんに目を掛けていただくなど出世の階段を上っていきます。

その一方で、次兄・明は当時「死の病」と呼ばれた結核に罹患、療養生活を余儀なくされるのです。そして昭和二十八年、病から癒えた次兄が選んだのが特殊学校の職員の道でした。そこで障がいを持つ子供が置かれた厳しい現実を知り、心に期すもの



祉のために奔走してきた二人の兄でしたが、光貴は、十一年前に八十一歳で、明は、五年前に八十五歳でこの世を去りました。そして、当初からともに働いてきた知的障がい者の方々も次々と来世に旅立たれています。

昨年三月にも三十年間ともに働いてきた方が亡くなられました。その通夜に参列した際に、ふと私が遺影を見上げると、そこにはホンダさんとお揃いの白い作業着と制帽を身につけ、自信と誇りに満ちた表情をした彼の姿がありました。他の写真もあつたでしょうに、わざわざご家族の方がこの作業着姿のものを選んでくださったのだと思うことができませんでした。五十余年取り組んできた活動が報われたような気がしたのです。

もし、二人の兄が彼の遺影を見たならば何を思うことでしょう。これからも私は兄たちの遺志を継ぎ、障がいのある方も健常者の方とともに働き、心を通わせていける社会の実現を目指し、命ある限り尽力していく所存です。

(いでなわ・まさゆき) 社会福祉法人進和学園理事長

があつたようで、明は私たち家族を集めこう言ったのです。

「私は障がいがある子供たちを守るために、一生を捧げたい」

人のために尽くそうという弟が可愛くも頼もしかったのでしよう。苦しい家計の中で何とか私たちを養っていた長兄でしたが、亡き父が遺してくれた平塚の家屋敷を開放し、児童施設を運営することを許してくれたのです。こうして昭和三十三年、知的障がいの子供たち三十名を受け入れるところから進和学園はスタートを切ったのです。

とはいえ、確固たる経営基盤や運営ノウハウがあるはずもなく、日々の食事にも事欠く始末。さらに、当時の児童福祉法では成人を児童施設で受け入れることはできなかつたため、彼らの成長とともに就業の問題にも直面します。特に重度の障がいを持つ方たちを受け入れてくれる他の施設を探すことは容易ではありませんでした。

思い悩んだ末に、私たちは進和学園で就業支援もできる成人・授産施設を創ろうと決意。さっそく方々駆け回り、土地は地元の方にお借りし、建築費の補助を行政に懇願して何とか工面し

ました。しかし、肝心の安定した収入を得られる仕事が一向に見つからないのです。

そのような窮状に手を差し伸べてくださったのが本田宗一郎さんでした。当時、長兄・光貴はホンダを退職してはいましたが、弟を何とか助けたいと本田さんに頼んでみてくれたのです。さっそく、後に副社長となる西田通弘さんが当園までお越しください、次兄の一途な思いに心打たれたのか、就業支援を即決してくれたのです。

すぐに、ホンダの皆さんが設備の設置や技術指導をしに来てくださったのですが、その熱血ぶりには大いに感動し勇気づけられました。数か月にわたって当園に泊まり込み、徹底した指導をしてくださり、さらには、ホンダさんと同じ白の作業服も寄贈してくださったのです。

当然、ホンダの皆さんと知的障がい者の方たちは言葉で意思疎通することはできません。ところが、しばらくすると、ホンダの皆さんが作業場に入ってきただけで、一同、ビシッと背筋を正し、黙々と作業に没頭するようになっていったのです。人間は、同じ目標に向かって汗を